



## 木もれびの森の冬景色

木もれびの森は冬も素敵です。落葉樹は葉をおとして「俺は、ここにいるよ」とばかり凜とした立ち姿を際立たせています。木々の枝先には冬芽がついています。厳しい冬の環境に対応して様々な工夫をして春をまっています。コブシ・ハリギリ・ニワトコなど近くで観察するのも面白いですよ。落葉樹でもヤマコウバシは葉を付けたまま春を迎えます。クスノキ科の木で厳しい環境にも負けずに花を咲かせ新芽が出る頃入れ替わります。名前は枝をおると香ばしい香りを放つ事に由来。受験生のお守りとして人気の葉になっています。一見して色彩がないような森にも、シロダモ・マンリョウ・ヤブコウジの赤い実が目をつけます。足元のジャノヒゲの仲間の青い実、ヤブランの黒い実、トキリマメ、マムシグサのオレンジ色など沢山の果実が楽しませてくれます。フユノハナワラビは霜に打たれながらがんばっています。運が良いと春一番に咲く小さなピンク色のウグイスカグラの花を見る事ができます。ヒガンバナやキツネノカミソリは青々した葉をのぞかせています。林床のカシワバハグマ・コウヤボウキの果実の落ちた総苞の様子がドライフラワーのようで可愛いです。足元の落ち葉を踏みながら歩くとカサコソと冬の音がします。落ち葉をめくってみると、フデリンドウやタツツボスミレの葉が春を待ち構えています。



1年に一度ぐらいでしょうか。雪が降りだして積もった景色は圧巻です。木々に白い花が咲いたようで美しいです。四季おりおりに私たちを楽しませてくれる「木もれびの森」、相模原の宝ですね。(高橋)

## 木もれびの森の薬用植物(16)

リンドウ (リンドウ科リンドウ属)

リンドウは和名「竜胆」、生薬の「竜胆」は中国、朝鮮半島に自生するトウリンドウ等の根および根茎で、日本に自生しているリンドウはトウリンドウの変種です。リンドウは雄性先熟で、5本の雄しべが花粉を放出した後開くと、雌しべが現れて柱頭が2つに分かれます。花が順に咲いて雄性期、雌性期をずらすことにより、自家受粉を避けています。



竜胆は、苦味成分のゲンチオピクロシド等の成分を含み、苦味健胃作用を持つ民間薬として使われてきました。生薬として現在使われているのは輸入品で、漢方方剤では消炎、解毒の生薬として疎経活血湯(そけいかっけつとう)、竜胆瀉肝湯(りゅうたんしゃかんとう)等に用いられています。

漢方方剤の基となる古典の記載に違いがあるので、同じ処方でもメーカーによって配合割合が多少違います。また、漢方といっても流派の違いがあるため、同じ名前の方剤でも中身が全く違うことがあります。K社の竜胆瀉肝湯は一貫堂処方といって他社製品より構成生薬の種類が多くなっているため、他社製品が急性炎症時に効果があるのに対して、K社のものは炎症の急性期を過ぎてでも使える処方となっています。(川村)